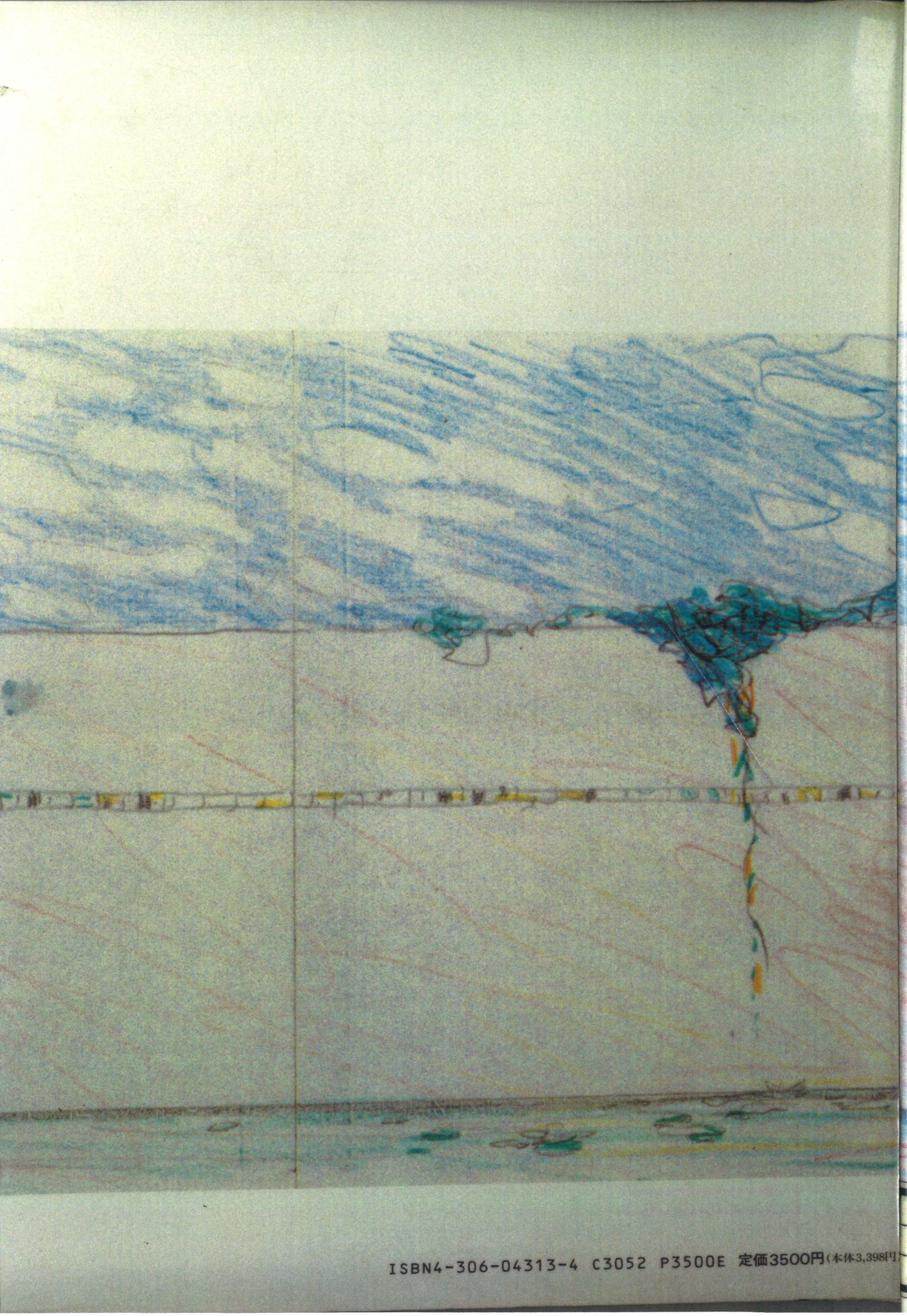

ISBN4-306-04313-4 C3052 P3500E 定価3500円(本体3,398円)

《現代の建築家》

Carlo Scarpa The Drawings of Carlo Scarpa カルロ・スカルパ❷

520
カ
2

Carlo Scarpa

The Drawings of Carlo Scarpa

《現代の建築家》

カルロ・スカルパ

❷

福井市立 みどり図書館
21082511 3

鹿島出版会

カルロ・スカルパ図面集

カバー写真：
ブリオン家墓地
ドローイング：カルロ・スカルパ

目次

7
断章
カルロ・スカルパ

8
建築は詩たりうるか
——1976年ウィーン造形芸術アカデミーにおける講演より
カルロ・スカルパ

86
氷結した微震動
豊田博之

129
Can Architecture Be Poetry?
Carlo Scarpa

作品

●

13 ブリオン家墓地
31 ブリオン家墓地：図面
32 図面：1970年承認図
34 図面：配置図
36 図面：入口棟
42 図面：池とパビリオン
54 図面：ブリオン夫妻の墓
64 図面：親族の墓
68 図面：チャペル
84 チャペルのスタディの変遷

89 パルチザン慰霊記念碑
90 フェルトレ遺跡博物館
92 ヴェネツィア大学文学部・哲学部校舎の増改築
94 ガヴィーナ・ショールーム
98 ピカソ美術館（指名競技設計）
101 パルチザン慰霊記念碑
102 リヤドの大邸宅
104 ヴェローナ市民銀行本店の増改築
ヴェネツィア大学文学部・哲学部校舎の増改築
105 テロリスト爆破事件犠牲者慰霊碑
106 メッシーナ国立美術館
108 ヴェローナ市民銀行本店の増改築
110 マテアッツィ・キエーザ邸の増築
111 デ・ベネデッティ・ボナイウート邸
112 ヴェネツィア大学文学部・哲学部校舎の増改築
113 アントニアーナ銀行モンセリーチェ支店
115 フェルトレ遺跡博物館
116 聖カテリーナ修道院の市立美術館への改修
118 ゾッパス邸
119 オットーレンギー邸
120 ツェントナー邸の改修

The Drawings of Carlo Scarpa

Cover Photo:
Brion Family Cemetery
Drawing by Calro Scarpa

CONTENTS

7
Fragmentary Words
Carlo Scarpa

8
Can Architecture Be Poetry?
Carlo Scarpa

86
Frozen Tremors
Hiroyuki Toyoda

129
Can Architecture Be Poetry? (in English)
Carlo Scarpa

Works

●

13 Brion Family Cemetery：
31 Brion Family Cemetery：Drawings
32 Drawings：Project Approved by the Altivole Town Council
34 Drawings：Site plan
36 Drawings：Propylon and Corridor
42 Drawings：Large Pool and Pavilion
54 Drawings：Tomb of the Brions
64 Drawings：Tomb of the Brion Family
68 Drawings：Chapel
84 Studies for Chapel

89 Installation Design for Women of the Resistance Monument
90 Project for Protection and Display of Roman Remains, Feltre
92 Project for Modification and Extension of the Convent of San Sebastiano for the University of Venice
94 Gavina Showroom
98 Competition Project for the Picasso Museum
101 Installation Design for Women of the Resistance Monument
102 Preliminary Studies for a Large Villa in Ryad
104 Layout of Main Premises and Annexes of the Banca Popolare di Verona
Project for Modification and Extension of the Convent of San Sebastiano for the University of Venica
105 Studies for Memorial to the Victims of the Terrorist Massacre at Piazza della Loggia
106 Project for the National Art Gallery, Messina
108 Layout of Main Premises and Annexes of the Banca Popolare di Verona
110 Project for Extension and Restoration of Villa Matteazzi-Chiesa
111 Project for De Benedetti-Bonaiuto House
112 Project for Modification and Extension of the Convent of San Sebastiano for the University of Venice
113 Project for the Banca Antoniana Monselice
115 Project for Protection and Display of Roman Remains, Feltre
116 Project for Conversion of the Convent of Santa Caterina into a Museum
118 Project for Villa Zoppas
119 Ottolenghi House
120 Renovation of Zentner House

特集＝

カルロ・スカルパ図面集

——その詩的創造の秘密

SPECIAL FEATURE

The Drawings of Carlo Scarpa:

The Secrets of Poetic Imagination

文+写真＝豊田博之

Texts and photographs by Hiroyuki Toyoda

カルロ・スカルパ(1926—1978)

断章

カルロ・スカルパ

ブリオン家墓地の仕事。それは奇妙なものであり、かつ興味をそそるものであった。その設計の仕事はたやすいものではなかった。

現代の社会において、権威からまったく自由であるということは稀なことである。自由であり、解放されているというところにおいては機能的な合意をどこかに求めようとすることが可能かもしれない。しかし、まったくの自由というものがありえないとしたら、もしかしたらそんな合意などないのかもしれない。また、そうであれば、この仕事に対する批判に対処するべく様々に分析をしてみせる必要性もないのかもしれない。

この小さな仕事を振り返ってみると、私のやった仕事の中でもまあまあ上出来だったものだと思う。もし彼ら（クライアント）が許すならば、そしてもし時間も許すならば、多分さらに良くなったであろう。

私が作ろうとしたもの。それを何と呼んだらいいだろうか？　詩的幻想、もしあなた方がそう呼ぶならばそれもいい。しかし、詩的な建築という言い方は正しくない。明確な性格の正統性の中に位置付けられる、詩的感覚から出てきたある種の建築を作るためである。

建築は「詩」であろうか、という問いがある。もちろん、建築というものは「詩」である。ある時にフランク・ロイド・ライトが明言したように、答えは「イエス」なのだ。

また当然ながら、時には建築は「詩」であるが、常に「詩」であるとは限らない。社会はいつも「詩」を求めはしない。「詩」は毎日必要なものでもないし、また、「詩」そのものについて毎日考える必要もない。

建築は「詩」である。だが、「詩的」建築を作る、と言い切ることは絶対にできない。「詩」はそれ自身のものの中から生まれてくるものなのだから。もの、そして建築自身がその中に詩を持っているのである。それが自然の摂理というものだ。　［訳＝豊田博之］

建築は詩たりうるか

1976年11月16日、ウィーン造形芸術アカデミーにおける講演より

カルロ・スカルパ／訳＝櫻井義夫

私の建築における背景

私をこの地にお招きいただき、感に堪えない思いでおります。と申しますのも、私の教育的背景は、地理的に見ても学生時代において、ウィーンの現代的潮流が身近に感じられ、自然にそれに傾倒してゆくような位置にあったからなのです。特に皆さんもよくご存じの著名な人々に影響を受けました。もちろん我々が最もよく知り、愛した芸術家は［モデルネ・バウフォルメン］［ヴァスムート］などのドイツの雑誌に最もよく出版された、ヨーゼフ・ホフマンでした。ヨーゼフ・ホフマンは、美術学校の生徒であれば学ばねばならぬ装飾に関して、素晴らしい感覚の持ち主でした（ラスキンが、芸術とは装飾であると言っていることを思い起こして下さい）。こうした事実は、私とホフマンの両人が基本的に方向性を同じくすることを示唆しています。つまり、私は心の中ではビザンチン人であると思っていますし、ホフマンにも、ヨーロッパ人がオリエントを指向しているような東洋的な何かを発見することができるはずです。彼の表現主義的な形態を知る者にとっては、私の申し上げることが直観的に理解できると思いますが、それを説明するのは大変難しいことです。ですから、それらのことについて難解で不思議で神秘的な知識を教授達が誇示したとしても、いたし方ないのです。実を申しますと、私はローマのヴィットーリオ・エマニュエーレ二世記念堂に発する文化的伝統の後継者なのです。と言いますのも、私は私の学んだ先生の一番弟子でしたし、その彼は、このモニュメントを設計した先生の一番弟子だったからです。したがって皆さんは我々よりも恵まれていると思います。皆さんはインターナショナル・スタイルというのでしょうか、普遍的な国際的文化の環境にいるからです。残念ながら当時のイタリアは、文化的には貧困な時代でした。それはもう、とても厄介なことでした。ここのようなアカデミーで教えていた造形というのは、19世紀的な折衷主義的趣味だったからです。我々は、自らの学んだ学術的経歴から離別するという、つらい時代を生きたのです。我々が仮にこの分野において全く今日的であったにしても、もし自分が芸術家であると主張しようとするならば、いずれは獲得せねばならない芸術上の個人的な能力やある種の倫理観に到達するためには、誰しも最善を尽くさなければならないのは当然のことではありますが。誰しも母胎から切り離されねばならないのです。

その後、学校を卒業する頃になって、ある本と幸運な出会いを持つことができました。それは［建築をめざして］という本でした。著者は皆さんご存じでしょうが、この本が私の心を広げてくれたのです。実際この本との出会いは皆さんが言うところの、「シュトゥルム・ウント・ドランク」（疾風怒濤）とでも言えるような純粋な一瞬でした。私の世界観はその時から全く変わってしまいました。これまでのささやかな人生においても、実際名人の人生でありたいと思ったことはありません。現在では、とても名人などいるとは思えないからです。「名人」とは他の人々が耳を傾け、できることならば理解しようとするような何か新しいものを表現する人のことです。しかし私達は、いや失礼、私はと言おうとしたのですが、私は名人ではありません。私の貧弱な頭の中には、私が名人と呼ぶ人々の生んだ現代的表現で埋め尽くされているのですが、我々にとっても悲しいことに、彼らはもはや一人も生きてはおりません。その最後はルイス・カーンでしたが、不幸な亡くなり方をされました。それは甚大な損失です。彼らはかけがえのない人々だからです。

詩的な建築作品の創造

私のいただいた招待状にあるテーマは、建築は詩たりうるか、ということでした。これがドイツ語の正しい翻訳であると思いますが、そう、もちろん詩たりうると思います。フランク・ロイド・ライトもロンドンにおける講演でこのように言っています。「皆さん、建築とは詩であります」と。したがって答えは、はいということになります。建築は時には詩となります。したがって詩は日常のことではありません。例えば私が詩的な建築作品を創造するとします。作者にその資質があるならば、詩情はその中から浮かび上がってくるものです。あるいは建築の実施から完成までの間の種々の条件から引き出されるものです。私が申し上げたいのは、建築も時には詩となる、昔にもそうであったように、今日においてもそうなりうるものだということです。この近くにあるヨーゼフ・オリブリッヒのゼセッション館も詩的であると言えるでしょう。詩に満ちています。この問題を問う別の方法があります。古代ギリシアの壷のどれが詩的であり、どれが詩的でないのかを問うことです。同じようなふたつの壷にも大きな違いがありうるということです。

皆さんは建築が詩的であるためには、ハーモニーがなければならないとおっしゃるかもしれません。ハーモニーとは美人の顔のように、すべての比例が完全であることを言います。ある古代ギリシアの壷は詩的であり、もうひとつはそうではない。それに対し建築は把握することの非常に難しい言語です。私は、建築を目指される皆さんに申し上げているのではなく、一般の方々が建築を見る場合について申し上げているのですが。しかし世界中で、絵画や彫刻は広範囲に理解され、たぶん詩も、そして音楽もかなりよく理解されているのに対し、建築は相変わらず秘密めいた言語であり続けているのです。

以前申し上げたことがあると思いますが、私は日本に行ったことがあります。日本では神道信者と仏教徒をはっきり見分けることができます。仏教は中国の潮流であり中国の影響を受けたものですが、神道は純粋に正真正銘の日本のものです。我々の現代的な趣味、評価の範疇は親神道的であり、仏教のそれではありません。ということは、「栄光に満ちた」中国の建築は、私達の好みではないのです。いつも日本に行けるとは限りませんから、もし皆さんが本を見られるならば、その違いをご覧いただけると思います。建築的に見れば、神道が仏教に比べて詩的であるとは必ずしも言えませんが、私の意見では、これは大きな価値の逆転であると思います。なぜならば作品の価値はその偉大な表現にあるからです。こうした価値をうまく表現しているものは、高く評価されることになるのです。私はここに説教を垂れにきたのだと思われては困ります。私は素朴で単純な人間です。私はいくつかの作品を作りました。私はスペシャリストです。現代社会はスペシャリストを好んでいるにもかかわらず、彼らを決して信じていないからこそ皮肉の意味を込めてこう言うのですが。しかし私は展示デザイナー、あるいは美術館建築家とでも言うべきものになってしまいました。それが私の作品なのですが、小さな作品で、モニュメンタルな建築などというものではありません。

ブリオン家の墓地

それでは最近作であるブリオン家の墓地を説明到しましょう。それはとても当惑するような奇妙なものです。こうしたものの建設が許されるというのは社会的に見てそう簡単なことではないと思われます。それは現代の合理的な思考形態を排除するような、作品にとっては無駄なこととされるような、かなり問題のある領域を含んでいるからです。

私はこの作品を、こう言うのを許していただけるならば、かなりよい作品、そしてますますよくなってゆく作品だと思っております。私はここに詩的な想像力を注入しようと考えました。それは詩的な建築を作ろうと思ったからではなく、ある種の形態的な詩の感覚を発生しうるような種類の建築を作ろうと思ったからです。形態表現が詩になるのだと言っているのではありません。先にも申し上げたように、故意に詩を作ることはできないのです。それではお分かりになり易いように、もっと具体的に説明したいと思います。ある人物がイタリアで亡くなりました。勤勉な労働と意志の力で下層階級から身を立てた彼を、家族は讃えようと考えました。彼の墓を立てることで讃えようとしたのです。家の墓は当初、共同墓地内に設けられようとしましたが、家族はもっとスペースが必要であると考えました。土地の持ち主は、半端な大きさではなくそれ以上に売ろうと望みました。私にとっては100㎡もあれば充分と思われましたが、2200㎡となりました。そこで我々は家族の墓のためのシェルターを建てようと決めました。悪天候から彼らを守るためのものです。

ブリオン夫妻の墓は光溢れる場所にあり、そこは最も美しい展望が得られる場所となります。故人はこの村に生まれたために、その棺は地面近くに置かれるように求められました。そこで私は小さなアーチを作ることとし、アルコソリウムと呼ぶこととしました（アルコソリウムというのは、ラテン語で、初期キリスト教時代のカタコンベであり、重要な人物、あるいは殉教者などが葬られた場所のことです）。私はそれをかなりお金のかかる方法で作りました。ここでアルコソリウムと呼ぶものは、単にカトリックの伝統から採ったシンプルなアーチ以外の何物でもありません。互いに愛し合った二人が死後においても互いに声を掛け合うことができるように配置されるというのは、面白いアイディアだと思ったのです。直立不動の兵士にしても、人間的な動きが感じられるものです。

アルコソリウムは橋状のアーチとなりましたが、このコンクリートのアーチは、何かそこに加えなければ、装飾を施さなければ本当に単なる橋だったでしょう。ここでは色を塗る代わりにモザイクを使いました。ヴェネツィアの伝統に別の解釈を施したわけです。

共同墓地に向かってまっすぐに続く糸杉の並ぶ小道があります。イタリアの小さな墓地には常に糸杉があるのです。建築家は小道が大好きですから、イタリアにはすごくたくさんの小道があることになりますが、この小道の正面にプロパイロンと名付けたブリオン家の墓地の前門があります。プロパイロンとはゲート、入口とでもいうような意味です。

この墓地での最初の印象的な光景は、プロパイロンを入った突き当たりにあるふたつの「目」を通して得られるでしょう。広い平地にフランスでガゾンと呼ぶ芝を貼りました。その緑が見えるのです。またブリオン家の墓地の広大さを合理化するために、葬儀に供する礼拝所（チャペル）を併設するのがよいと考えました。それでもまだ大きすぎるように見えたので周囲に壁を巡らそうと考えたのです。この土地を私は聖なる地と呼びました。と申しますのも、外部からは内部を覗くことができないのに内部からは美しい展望が得られるからです。

村から共同墓地を通らず、ブリオン家の墓地に直接アプローチすると、葬儀のための礼拝所を通ります。この礼拝所は一般の人々のためにあり、土地も国有地ですから、この家族もそれを共用する権利を持っているにすぎません。

大きな池の中には小さなパビリオン、「瞑想のためのパビリオン」があります。ここで人は初めて自分の領域を感じることができます。以上が私の計画したものの要約です。

死者のための地は庭園です。結局19世紀のアメリカの墓地は、シカゴにあるように、大きな公園のようなもので、典型的なナポレオン風というよりは（あれはひどい代物です）大きな公園なのです。車で乗り入れることができるし、素晴らしい墓碑もあります。そのいくつかはサリヴァンのデザインによるものです。現代のイタリアのほとんどすべての墓は、ちょうど靴屋で見る箱のようなものです。死者をエレベーターで持ち上げる墓地すらあるのです。幸いなことにヴェネトはさほど密度は高くなく、人々も落ち着いた生活をしています。靴箱にではなく、それ以外にこの市民社会の中で死にゆく方法があるのではないか、そうしてさらにうたかたの人生において死がどのような意味を持つのかを示すこともできるのではないかと、ここで試みたわけです。つまり現代の法律は、死者を直立した姿勢で、しかも古代のように包んで埋葬することを許可すべきだということです。法を変えることによって空間の節約が可能になる。人を立てて埋葬する、それだけです。場所が不足してきているのですから。靴箱に収まるくらいなら、別の方法を考えるべきです。恥ずかしいことに、私の国ではその階級

にかかわらず墓を得るためには、なり振りかまわず、「ロクーロ」と呼ばれるニッチにでさえ満足しているのです。これは慣習と言ってしまえばそれまでですが、それにしてもひどいことだと思います。

［質疑応答］

――スカルパさんはサン・ヴィートのブリオン家の墓地の脇に自らの墓をお持ちだと伺っておりますが、本当ですか。そこを選ぶにはどのような基準で選ばれたのですか。

はい、おっしゃるとおりです。それは経済的な基準です。地下から復活しても現代社会はお金を払わせるからです。ただ単に節約しようとしただけのことです。一画に小さな場所があるのです。チャペルへのアプローチ側から共同墓地に入ったところの隅のところです。ですから私はこの市営の誰のものでもない雑木林に眠ることになります。誰もこれを変えることはできません。私の気まぐれです。これでよろしいのですか。それは［アルシテクテュール・ドォジュドゥイ］誌で読まれたのですか。

――いいえ。村の食堂の女将さんから聞きました。

ブリオン家の墓地に行かれたのですか。場所はお分かりですね。ヴェネトでもとても有名になっています。皆さんが見に来られるのですが、おかしなことにまだ竣工していないのです。しかも雨漏りがする。オーストリアの技師にお願いして、どのように防水するのか教えてもらったらよいと思います。あれを見られた方の中には、私のことを大金持ちの手先のように思われる方もおられるかもしれませんが、例えばミラノ、ウィーン、ベルリン、ローマなどで家族の墓を立てるために一片の土地を購入するとします。法規的に大理石を貼らなければならなくなったり、彫刻を奢ろうとするならば、１億５千万リラから２億リラくらいかかってしまう。しかも著名な彫刻家、例えばマリーノ・マリーニや、ジャコモ・マンズー、あるいはヘンリー・ムーアということになればさらにかかってしまうでしょう。こうした作品の値段は、現在では１億５千万リラ位にはなるでしょう。また私が全建設費と同じぐらいの報酬を得たかのように言われることもありますが、そんなことはありません。またそう願ったこともありません。私は真のコミュニストですから。

――このような埋葬について、どのようなお考えか興味があるのですが、つまり、あなたあるいはイタリア人一般にとって、ある種の埋葬が死後の世界の保証になるのでしょうか。

これは奇妙な質問で……いえ、はっきりとは分からないと言いましょうか。正確な表現ではないようです。「保証」とは一体どういうことでしょうか。あなたのお考えになる「死の保証」とは一体どういう意味ですか。

――つまりふたつの意味があると思うのです。場所の重要性、そしていわゆるその神秘的な意味。その点をお信じになられますか。

私は敬虔なローマ・カトリックの家庭の出身です。私は礼拝をしませんが、それはほとんどの人と同様ですね。我々の多くは子供の頃に受けた宗教教育を忘れてしまっていますが、記憶の中には奥深い倫理的素地として存在しています。ある種の条件は確実に存在しています。伺いたいのは、皆様も火葬をお好みになるかということです。カトリック教徒ですら、充分な場所がないということで認めてきているのです。生きている人よりも、死人の方が多くなる。一体どうなってしまうのでしょうか。フランス革命に始まって、有名なナポレオン法も、社会的な意味で、誰でも土地が得られることを少なくとも一時期には認めていました。エジプト、ローマ時代では、富裕で権威を持つ者のみが自らの墓を持つことができました。貧しい大衆、世界中の卑しい人々、何の権力も持たぬ者達はどうなってしまったのか。灰の中、塵の中、失われた時の深みに埋もれたのです。実際ナポレオン法は、今日でも民主的と呼びうるものであり、フランス革命の焼き直しではありません。フランス革命は自由、平等、博愛を唱ってはいても、皆が対等であり、皆が兄弟であり、今日の共産主義のようではあっても、そうはならなかったのです。残念ながらそのような世界ではなかったのです。ナポレオン法によって解釈された墓地とは、壁、コロネード、緑地、キャンパスすなわち一般の人々のための聖なる広場、小さな象徴を意味していたのです。しかし地域議会は、実利的な理由により、すぐに投機を始めました。単に土地を売ったわけです。あるものは安く、それ以外のものは高く。このようにして墓を立てる。一般大衆はこちらに、富裕階級、新しい中流階級はあちらに。このように公共空間は次々にモニュメンタルな墓碑が充満してゆき、その伝統は今日でも生きているのです。

前にも申しましたように、ジュゼッペ・ブリオンはこの村の出身であったために、その家族である妻と娘がこの土地を買うことを決め、興味深い環境が生まれました。もちろん私は大きな彫像を立て、余地を芝で残すこともできましたが、ものを作ることを楽しんだのです。社会性溢れると思えるようなアイディアを持っていたのです。つまりすべての人に帰する場所、例えば子供も遊ぶことができるような。私はアゾロに住んでいた時には、大変近くですから、よくそこに行きました。瞑想の場、平和で異教的で、しかも大変美しい場所です。そこにいることを楽しむことができるのです。靴箱や強烈な箱のない平和な状況の中に死者を訪れることができるのです。

私が驚いたのは、この墓地を訪れるヴェネツィアの建築の学生が盗みをしたり、ものを汚したり、「資本主義者くたばれ」とか「スカルパ強欲野郎」などと落書きをしたことです。私は誰にも私自身を売り渡したりはしませんし、いまだかつてそうしたこともなければ、これからもならないでしょう。私は自由な精神を持っているからです。棺桶を作ることもできますし、お望みであれば、この方のために椅子を作ることもできます。皆さんだって何でも作ることができるはずです。きれいなネクタイをデザインすることもできれば、万年筆あるいは「スカルパ」（靴）だってできる。デザインすることができる。何でも発明できる。「デザイン」とは何を意味するのか私には分かりません。

――この墓地に対して、村の人々はどのような反応を示しましたか。

これまでは皆さんとても喜んでいる思います。日曜日には見に行ったりもしているようです。そこで散歩をしたり、子供達は遊んだり、犬はころげ回わったり。ここで申し上げたいお話しがありました。牧師がこの模型を初めて見た時には、こんなふうでした。「これがたった一人のためのものですか」続けて「かわいそうな牧師のためには何かないのですか」と言ったのです。それについては考えておりませんと私は言いました。この国イタリアでは、牧師は教会の中に埋葬され、一方では街の中の独立した墓地の中に、修道女は一方に、修道士は別の所に置かれると思っていたのです。そこで初めて私はこうした場所を用意したのです。地面を10cm下げたところに、9.5mの高さになる11本の糸杉を水とともに配置したのです。７本のうねを設けた所には、通路と草に覆われた塀があります。こうして修道女、修道士のための空間ができたわけです。それぞれ20ヤード長の８面の、つまり総延長160ヤードの修道士のための埋葬の空間が用意されました。このように、ブリオン家の墓地を金持ちの道楽と呼ぶのは間違っていると思います。むしろ全く逆なのです。古代の首都のように、街に美しいものを創るというぜいたくを供与するようなものと考えています。ちょうどそのようにしてできたのです。さもなければ私達の視点から見ることによって、そういった過去の作品は、皇帝や王によって作られたものだからという理由で破壊せねばならなくなります。今日我々のすることと言えば、ただ「ああ素晴らしい」と驚嘆の声を上げるだけではありませんか。機械は現代社会秩序に恐るべき問題を生み出しました。すべてのものは機械化されました。機械とそれに類するものによって、機械的な現代社会機構から大きな問題が生まれているにしても、我々は古代ギリシアの起源に遡りうるような最高の理念に到達できるよう闘わねばならないのです。当時は、ポリスは高貴であり神聖であると尊ばれ、神あるいは国家という概念として信頼されていました。そして今はできる限りよりよく生き、現代技術の恩恵を被るように努力せねばならないのです。私は大衆の一人にすぎませんから、ヴェルサイユの広大な公園で散歩したいと思いますし、子供達、そしてまたその子供達も遊ばせたいと思います。こうしたモニュメントのすべてが巨大ではなくとも、すべての人々に共有されるというのは、現代の大きな夢ですから。私個人の思想を付け加えるならば、偉大な芸術作品は概して小さなものです（これは私の設計した墓地とは何の関係もないことですが）。

――タバレッリ夫人から聞いたのですが、あなたは素晴らしいパスタ料理を作られるそうですが、それもあなたの世界観の一部ですか。

私ですか。妻ですか。もちろん。よい建築家であるためにはグルメでなければなりません。建築家は皆、食べることが好きだと思います。いや、そうとばかりは言えないかもしれない。私は30歳から40歳の時に、何人もの偉大な建築家に会いました。本当に偉大な建築家達でした。フランク・ロイド・ライト、いやあの時はもっと年で50歳位の時だったか、そしてルイス・カーン、アルヴァ・アアルト。そしてアアルトは飲んでばかりいて、あまり食べませんでした。その時、優れた精神は食物になど留意しないものだと思いました。私があなたと同じくらい若い時には、体重57キロ位でしたが、今は90キロあります。何故あなたにこのようなことを申し上げなければならないかと言えば、私は食べ物にすべての喜びを見出してしまい、そのために偉大な建築家にはなれないだろうと思ったからです。もうひとつ、アメリカの戯曲家、ソーントン・ワイルダーのジョークを。「もう一杯ワインをお願いします。高貴な淑女達の健康を祝して」。

［“The Other City Carlo Scarpa”1989より転載］